

特殊要因によるもので、とくに従来の基調が変わっているとは観じがたい。

なお、加入者引受け電電債の市況は、引き続き難金融機関、一部地銀筋および一般投資家からの引合いが多く、これに対し証券筋の売腰も強いため、相場は依然上伸を示している(46年償還の利付債利回り、12月28日 9.93%、1月12日 9.68%、1月末 9.13%、2月12日 8.99%)。

## 実体経済の動向

### ◇生産の大勢、引き続き弱含み横ばい

12月の鉱工業生産(季節調整済み)は、前月1.0%と増加のあと1.6%の反落を示し、今回の景気調整期において初めて前年同月の水準を下回った。最近の生産動向をならしてみると、7～9月、10～12月とそれぞれ前期を若干下回っており、生産の大勢は引き続き弱含み横ばいに推移しているとみられる。なお、1月は速報で+2.8%(季節調整済み)となったが、大型機械の生産など一時的要因が響いている点もあり、生産の大勢には変化はないものとみられる。

12月の生産を特殊類別ないし業種別にみると、各財軒並み減少となったが、まず資本財は、機械を中心にかなりの減産となった。これは一部大型機械の完工などから大幅増産をみた前月の反動ともみられ、10～12月をならしてみても引締め時(36年7～9月)の水準を下回るところまで落ち込んでいる。このほか、建設資材は製材の減少を主因に-2.9%の減少となった。一方、耐久消費財は民生用電気機械の伸び悩みから、また非耐久消費財も、ゴム製品、タバコなどの減産からそれぞれ-1.4%、-1.3%の減少となった。この間生産財は、ストによる石炭の大幅減産のほか鉄鋼、非鉄など中心に-1.4%の減少となった。

一方12月の鉱工業出荷は、前月かなりの増加をみたあと-0.1%の微減となった。10～12月の水準は7～9月よりはやや高目にあるものの、これは

輸送機械の出荷増、官公需、輸出にささえられた建設資材の出荷堅調による面が大きく、総じてみれば低迷の域を出ないものといえよう。財別にみると、資本財が前月に続きかなりの増加となったことが目立つ。これは、乗用車、トラックなど輸送機械ならびに一部大型機械の出荷増が主因である。このところ堅調を続けていた建設資材は、鉄骨、亜鉛鉄板などの増加の反面、耐火れんが、セメントなどが伸び悩んだため、6ヵ月ぶりに前月を下回った。また消費財も耐久消費財、非耐久消費財ともに、減少となったが、生産財は、石油石炭製品的大幅減少に対し鉄鋼、非鉄金属、繊維2次製品などの増加から微増となった。

12月のメーカー製品在庫は、+0.4%と引き続き増加し、在庫率指数も133.1とわずかながら(0.6ポイント)上昇した。10～12月中心にメーカー製品在庫の動向をみると、生産が抑制傾向にあるにもかかわらず、出荷の伸び悩みから在庫増加が続いており、その水準(10～12月の在庫率指数133.4)はすでに前回の景気調整期のピーク(33年1～3月133.3)をわずかに上回っていることは注目される。ただ、このところ建設資材、生産財には増勢頭打ちないし微減傾向がみられ、全体としてもさすがに増勢鈍化気配がうかがわれる。12月の動きをみると、資本財は、輸送機械が出荷好調

### 生産・需給動向(鉱工業)

(季節調整済み指数、前期比増減率は%)

		37年 1～3月	4～6月	7～9月	10～12月	10月	11月	12月
生 産	指 数	129.3	129.6	128.6	127.7	127.5	128.8	126.8
	前期(月)比	2.1	0.2	-0.8	-0.7	-1.8	1.0	-1.6
	前年同期(月)比	15.7	11.0	4.7	0.8	1.3	1.8	-0.5
出 荷	指 数	125.1	128.6	125.2	127.5	124.9	128.8	128.7
	前期(月)比	2.0	2.8	-2.6	1.8	-1.6	3.1	-0.1
	前年同期(月)比	12.8	10.5	3.0	3.8	2.5	5.2	3.8
製 品 在 庫	指 数	153.6	160.1	164.4	171.3	168.2	170.7	171.3
	前期(月)比	7.6	4.2	2.7	4.2	2.3	1.5	0.4
	前年同期(月)比	35.0	35.5	33.6	20.0	29.9	25.2	20.0
	在庫率指数	121.4	127.2	129.6	133.1	134.7	132.5	133.1

(注) 通産省調べ(35年=100)。在庫は期末在庫。  
前年同期比は原指数による。

から減少をみた反面一般機械が増加したため微増となり、また消費財も、耐久消費財、非耐久消費財とも出荷の伸び悩みから微増した。一方建設資材は、亜鉛鉄板の出荷増が響き、また、生産財も鉄鋼、繊維1次製品の出荷増から、ともに在庫減少をみた。

この間メーカー原材料在庫は、10、11月に小幅ながら増加したあと、12月は-1.1%と再び減少し、在庫率指数も95.1と1.3ポイントの低下をみた。これは、輸入分素原材料在庫が羊毛、綿花、鉄鉱石中心に軒並み減少したためである。しかし、10~12月をならした原材料在庫の水準は7~9月とほぼ横ばいであり、2~3月ごろをピークにその後進展をみた原材料在庫の調整はおおむね一巡し、ほぼ底入れの感が強い。10~12月の在庫率(同指数95.2)はすでに引締め前のボトム(36年4~6月、同94.0)に近いところまで落ち込んでいる。一方11月の販売業者在庫は、+1.6%と引き続き増加をみた。鋼材、織物を中心に製品在庫が増加したため、素原材料在庫は減少した。素原材料在庫には、メーカー原材料在庫と同様ほぼ圧縮一巡の感が強いが、大宗の製品在庫はメー

カーからのシフトもあって依然増勢を改めていない。

なお設備投資関連指標をみると、12月は、資本財出荷(輸送機械を除く)が+1.7%、機械販売高(船舶を除く)が+5.6%とそれぞれ前月比増加し、また機械受注高(海運を除く民需)も石油精製、窯業、合繊からの受注増を中心に+12.3%と増加をみた。しかしそれらは主として年末の季節的事情によるものとみられ、機械受注額とも、10~12月の水準は4~6月、7~9月を下回っている。ただその内容をみると、このところ業況悪化している鉄鋼などからの受注は依然減退を続けている反面、従来から強気の石油精製、合繊、化学、セメントなどは受注がふえている。なお行き過ぎた先行観の訂正に伴い、一部に設備投資計画再検討のきざしがあり、たとえば自動車業界などではいっそう強気を加えている。しかしこのような動きはまだ受注額に現われるなど表面化する段階ではなく、現状は底意に若干の動意がうかがわれる程度である。

#### ◇商品市況、繊維、鉄鋼など戻し一服ないし小反落ながら、大勢底固め傾向強まる

1月から2月前半にかけての商品市況をみると、繊維、鉄鋼がこれまでのジリ高商状から戻し一服ないし小反落を示したのが目立っているが、大勢としては、そうした小波動を経て市況の底固め傾向がうかがわれる。

鉄鋼は、12月以来ジリ高を続けてきたが、1月後半に至って、各品目とも軒並み騰勢頭打ちないし小反落に転じ、更月後も厚板、形鋼などを中心にジリ安商状を示している。繊維は、人絹糸が1月後半急反落したほか、綿糸、毛糸も小反落ないし保合いを示すなど、戻り足やや一服ぎみに推移、2月にはいっ

需 要 関 係 の 指 標

	37年 3月	6月	9月	10月	11月	12月
素 原 材 料 在 庫 (在 庫 率)	122.2 (102.7)	117.5 (102.2)	108.9 ( 94.7)	111.2 ( 94.3)	113.2 ( 96.8)	109.7 ( 94.1)
うち 輸 入 分 (在 庫 率)	124.8 ( 98.7)	120.5 (101.1)	105.6 ( 91.7)	110.9 ( 92.7)	111.7 ( 96.5)	106.5 ( 89.9)
製 品 原 材 料 在 庫 (在 庫 率)	129.4 (103.9)	121.3 (102.4)	117.2 ( 96.4)	116.1 ( 95.6)	116.5 ( 97.3)	117.4 ( 97.4)
販 売 業 者 在 庫 (前年同期(月)比%)	138.7 ( 21.7)	146.4 ( 19.1)	149.9 ( 15.6)	158.4 ( 17.8)	161.0 ( 19.6)	—
	37年 4~6 月平均	7~9 月平均	10~12 月平均	10月	11月	12月
機 械 受 注(海運を除く) (前年同期(月)比%)	億円 420 (-47.7)	488 (-45.7)	404 (-30.0)	451 (-34.6)	359 (-30.1)	403 (-23.9)
機 械 販 売(船舶を除く) (前年同期(月)比%)	億円 902 ( 15.1)	1,003 ( 11.9)	836 ( - 48)	809 (- 8.5)	826 (- 6.4)	872 ( 0.4)
資本財(輸送機械を除く)出荷	142.1	136.7	127.8	123.3	129.0	131.2

(注) 在庫、出荷は通産省調べ、季節調整済み指数(35年=100)。  
機械受注、販売統計は企画庁調べ。  
販売業者在庫の前年同期(月)比は原指数による。

てからも人絹糸中心に小反落が続いた。もっとも、中旬には再び小戻しに転じており、繊維市況の大勢は、一高一低のうちになお持ち直し傾向を変えていない。

こうした動きに対し、石油は高値ものが姿を消すなどひとところに比べると着着きを示しているものの、総じてなお堅調に推移、化学製品もこのところ徐々に地合いが固まり、一部(カーバイド、か性ソーダ)には小戻しが続いている。この間、セメント、木材は保合い、非鉄のみは実需不振や過剰在庫から弱保合いを示している。

このように最近の商況が、大勢立ち直り気配を持續しているなかにあつて繊維、鉄鋼に騰勢一服ないし小反落が目立っているのは、これまで需給実勢の改善の度合い以上に、市場における人气的な要因によってつり上げられていた市況が、ここへきて若干の訂正場面を迎えつつあるものとみられる。現に繊維については、仕手筋の利食売りの増加、高値追随難から機屋筋の補充買いの一服や、輸出成約難などが市況を冷やした原因とみられる。また、鉄鋼についても、12月以来の市況シ

リ高の背景には、基本的には高率操短の続行がテコをなしているほか、操短の効果や先行き需要増大に対する期待人気も加わっていただけに、一部特約店筋に一時買い進みがみられたとしても、実需がそれに伴って伸びない以上、反落の可能性は当然考えられたところである。最近の反落はまさにそうした小さな波動の一つとみられる。目先き一部商品に騰勢頭打ちないし小反落があるとしても、大きな反落は予想されていないことも見落してならない。高率操短が大きな支柱になっているとはいえ、昨年央からの動きを通観した場合、非鉄を除き全般的に大勢底固め圏内にあることがその根拠になっていることは否定できない。

この意味で市況はここ当分大底圏内での一高一底を経ながら次第に底固め商状を強めていくものと思われる。

1月の本行卸売物価は前半における鉄鋼、繊維のシリ高市況を反映して、前月比+0.6%と続騰したあと、2月上旬も+0.2%と微騰した。1月の消費者物価も、野菜、生鮮魚介、果物など食料品のほか、映画観覧料、理髪代、パーマネント代

### 卸 売 物 価 の 推 移

(単位・%)

	引締め前 33/11~ 36/9	引締め後 36/10~ 37/10	引 締 め 解 除 後 37/11~ 38/1	最 近 の 推 移							
				37 年 11 月	12 月	38 年 1 月	1 月 上 旬	中 旬	下 旬	2 月 上 旬	
総 平 均	+ 5.8	- 3.2	+ 1.4	+ 0.1	+ 0.7	+ 0.6	+ 0.2	+ 0.3	+ 0.1	+ 0.2	
食 料	+ 2.8	+ 0.2	+ 3.6	+ 0.3	+ 3.1	+ 0.2	- 0.4	+ 0.1	+ 0.7	+ 0.5	
織 維	+ 8.9	- 4.3	+ 7.7	+ 1.0	+ 2.6	+ 3.8	+ 1.3	+ 1.8	+ 0.6	- 0.4	
鉄 鋼	+ 6.3	-11.3	+ 0.3	- 0.5	- 0.9	+ 1.7	+ 0.9	+ 0.2	- 0.1	+ 0.1	
非 鉄	+ 7.8	- 7.1	- 0.9	- 0.3	- 0.3	- 0.2	- 0.1	保 合	- 0.1	+ 0.1	
金 属 製 品	+12.0	- 4.2	- 0.3	- 0.6	+ 0.3	保 合	- 0.1	保 合	保 合	保 合	
機 械	- 2.2	- 1.6	- 0.7	+ 0.1	- 0.8	保 合	+ 0.1	保 合	- 0.1	+ 0.1	
石 油 ・ 石 炭	- 7.9	- 2.7	+ 2.1	+ 0.3	+ 1.9	- 0.1	- 0.2	+ 0.2	- 0.3	- 0.2	
木 材	+37.6	- 4.2	- 1.2	- 0.3	- 0.6	- 0.2	- 0.1	+ 0.1	+ 0.2	+ 0.2	
窯 業	+ 6.4	+ 3.7	- 0.4	保 合	- 0.2	- 0.2	- 0.1	- 0.1	保 合	保 合	
化 学	- 3.0	- 4.3	- 0.1	- 0.2	+ 0.2	- 0.1	+ 0.1	保 合	- 0.1	- 0.1	
紙 ・ パ ル プ	+ 7.7	- 5.4	+ 0.7	+ 0.6	- 0.1	+ 0.2	保 合	+ 0.1	+ 0.4	保 合	
雑 品	+18.3	- 0.2	+ 0.1	+ 0.3	- 0.2	保 合	保 合	保 合	+ 0.1	+ 0.8	
工 業 製 品		- 3.4	+ 1.1	+ 0.1	+ 0.2	+ 0.8	+ 0.3	+ 0.4	保 合	+ 0.1	
非 工 業 製 品		- 2.6	+ 2.6	+ 0.1	+ 2.3	+ 0.2	- 0.3	+ 0.2	+ 0.4	+ 0.5	

(注) 38年1月改定の新指数(35年基準)による。

\* 印は戦前基準指数により算出(工業製品以下は不詳)。

などの続騰から、前月比 + 1.7% と大幅の上昇をみた(前年同月比 + 6.1%)。一方小売物価(東京)は、雑品が下落した反面、繊維品、食料品の値上がりを経て前月比 + 1.6% となった。なお12月の輸出物価は、硫安が下落したが、生糸、絹織物などの繊維品や合板の大幅上昇から前月比 + 1.1% と続騰を示した。一方輸入物価は原綿、原毛をはじめ、粗糖、原油、大豆などの値上がりから、+ 0.8% と前月(+ 0.7%)に引き続き上昇した。

C P I ・小売・輸出入物価の推移  
(単位・%)

		36年中	37年中	最近の推移			最近月の前年同月比
				11月	12月	1月	
C P I  (東京)	総 合	+ 8.8	+ 5.0	- 0.3	+ 1.4	+ 1.7	+ 6.1
	食 料	+ 10.6	+ 4.0	- 1.8	+ 2.0	+ 3.6	+ 7.0
	家賃地代	+ 3.9	+ 5.9	+ 1.1	+ 1.9	+ 0.1	+ 6.0
	サービス	+ 13.2	+ 12.9	+ 0.2	+ 0.6	+ 1.4	+ 11.9
	公共料金	+ 6.1	- 0.1	+ 0.7	保合	保合	- 0.1
	その他	+ 4.8	+ 3.5	+ 1.5	+ 1.5	- 0.5	+ 2.9
	被 服	+ 6.8	+ 7.0	+ 1.1	+ 1.2	+ 0.8	+ 7.4
	光 熱	+ 4.9	- 0.5	+ 0.5	+ 0.6	+ 0.2	- 0.3
	住 居	+ 6.8	+ 2.3	+ 0.8	+ 0.7	+ 0.3	+ 2.5
	雑 費	+ 8.1	+ 7.2	+ 0.8	+ 1.1	+ 0.2	+ 6.3
小 売 物 価	総 平 均	+ 7.9	+ 1.8	- 0.4	+ 2.0	+ 1.6	+ 3.5
	(食料を除く)	+ 5.5	+ 1.8	+ 0.2	+ 0.5	保合	+ 2.6
	食 料	+ 9.6	+ 1.7	- 0.9	+ 3.1	+ 2.8	+ 4.1
	織 維	+ 3.2	+ 2.8	+ 0.1	+ 0.4	+ 0.1	+ 5.4
輸 入 物 価	輸 出	+ 0.4	+ 1.1	+ 0.5	+ 1.1		+ 1.1
	輸 入	+ 0.1	- 0.6	+ 0.7	+ 0.8		- 0.6

◇貿易収支 8 か月ぶりに赤字ながら、季節事情などを考慮すればなお均衡圏内

1月の為替収支は、季節的事情もあって経常勘定で86百万ドルと大幅の赤字を記録した。輸出が季節的に減少したのに加え昨年12月末の積み急ぎがとくに著しかった反動もあって激減した一方、輸入が前月に引き続きかなり高水準となったことから、貿易収支が76百万ドルの赤字となったためである。貿易外収支は支払にとくに目立ったものなく10百万ドルの払超にとどまった。資本勘定では、長期資本は借入、証券発行とも大口のも

のではなく4百万ドルの受超にとどまったが、反面短期資本が、米国市銀に対する特別借入返済(50百万ドル)にもかかわらず、ユーロ・マネーの大幅流入や前月為替銀行の買取った輸出手形の資金化増嵩により105百万ドルの受超となったため、合計109百万ドルの黒字となった。その結果、総合収支戻は受超43百万ドルとほぼ前月並みの黒字となった(誤差脱漏+20百万ドル)。なお、目先き1、2か月の基調(季節性などを除いた実勢)をみると、貿易収支ではほぼ均衡圏内にあるものとみられる。

為 替 収 支 の 推 移  
(単位・百万ドル)

(月平均)	37年 4~6月	7~9月	10~ 12月	11月	12月	38年 1月
輸 出	386 ( 318)	411 ( 337)	437 ( 369)	405 ( 351)	505 ( 424)	320 ( 293)
輸 入	397 ( 427)	355 ( 424)	367 ( 416)	352 ( 399)	420 ( 453)	396 ( 382)
貿易戻	△ 11 (△ 110)	56 (△ 90)	69 (△ 47)	53 (△ 48)	85 (△ 29)	△ 76 (△ 89)
貿易外戻	△ 20 (△ 10)	△ 13 (△ 11)	△ 16 (△ 10)	△ 14 (△ 7)	△ 24 (△ 13)	△ 10 (△ 10)
経常戻	△ 31 (△ 120)	43 (△ 101)	53 (△ 57)	39 (△ 55)	61 (△ 42)	△ 86 (△ 99)
長 資	21 ( 20)	34 ( 9)	24 ( 17)	15 ( 13)	39 ( 10)	4 (△ 2)
短 資	49 ( 75)	△ 42 (△ 2)	△ 28 ( 3)	△ 61 ( 51)	△ 37 ( 17)	105 ( 160)
資本戻	69 ( 96)	△ 8 ( 7)	△ 4 ( 20)	△ 46 ( 64)	2 ( 27)	109 ( 158)
誤 差	△ 18 (△ 4)	△ 2 (△ 7)	△ 8 (△ 4)	△ 5 (△ 26)	△ 15 (△ 12)	20 (△ 35)
総合戻	21 (△ 28)	32 (△ 101)	40 (△ 41)	△ 12 (△ 17)	48 (△ 3)	43 ( 24)

(注) カッコ内は前年同期(月)。

1月の輸出(為替ベース)は前月に比べれば著減したが、これは季節事情や前月末積み急ぎの反動などによるもので、12月とならしてみれば、依然昨年4~9月ころの高水準を維持しているとみてよい。通関によって品目別の状況を見ると、水産品、繊維(合繊を除く)、化学製品などが前年に比べ不振であったのに対し、鉄鋼、光学機器が続伸、船舶、自動車なども好調であった。

輸出認証や信用状の動きから輸出の先行きをみ

でも、輸出は当面なお現在程度の水準を維持するものと思われる。1月の信用状は鉄鋼、韓国向け肥料などにさきえられて好調を示し、認証も表面では落ち込みがはなはだしいが季節性などを考慮してみれば同様高水準横ばい状態を続けているといえる。ただ、認証、信用状ともその増勢は昨年秋ころからほとんど止まっており、ことに輸出増加の中心をなしてきた対米輸出の伸び率が、信用状でみると漸落していること(1月は前年同月比+5%)、国内市況の若干の立ち直りから繊維や一部の化学製品などに輸出成約不振の傾向がみられないではないことなどからみて、今後の輸出の伸びはこれまでに比べ小幅にとどまる可能性が強い。

#### 輸 出 認 証 の 内 訳

(単位・百万ドル)

(月平均)	37年 4~6月	7~9月	10~ 12月	11月	12月	38年 1月
織 維	115 (+ 20)	114 (+ 14)	119 (+ 7)	111 (+ 11)	126 (- 3)	83 (+ 6)
化 学 品	22 (+ 35)	20 (+ 39)	19 (+ 21)	17 (+ 24)	21 (+ 18)	19 (+ 40)
金 属	62 (+ 29)	68 (+ 51)	74 (+ 41)	70 (+ 55)	81 (+ 25)	76 (+132)
機 械	114 (+ 25)	126 (+ 24)	119 (+ 5)	103 (- 1)	133 (+ 3)	96 (+ 22)
雑 品	39 (+ 35)	42 (+ 33)	36 (+ 25)	32 (+ 38)	36 (+ 6)	26 (+ 55)
合 計	436 (+ 28)	448 (+ 23)	457 (+ 15)	424 (+ 19)	490 (+ 6)	364 (+ 31)
米 国	124 (+ 44)	135 (+ 31)	127 (+ 19)	116 (+ 23)	133 (+ 13)	102 (+ 44)
ア ジ ア	100 (+ 14)	98 (+ 26)	106 (+ 9)	104 (+ 18)	108 (- 10)	91 (+ 37)
欧 州	57 (+ 58)	53 (+ 45)	61 (+ 50)	55 (+ 43)	70 (+ 52)	42 (+ 26)

(注) カッコ内は前年同期(月)比増減率(%)。

アジアは、インド、タイ、フィリピン、シンガポール、インドネシア、台湾、韓国、香港、琉球。

欧州は英国、西ドイツ、フランス、イタリア、スイス、ベルギー、オランダ、デンマーク、スウェーデン、ギリシア。

一方、1月の輸入(為替ベース)は前月に引き続き高水準を示し、前年同月比では9か月ぶりにわずかながら増加に転じた。食料の増加が目立つほか、繊維原料や石油なども若干増勢をみせている。昨年秋ごろから漸増傾向を示してきた輸入承認、信用状などの先行指標も、やや増勢一服気配がみ

られるものの依然高い水準にある。こうした先行指標の動きには、1月は本年度上期分外貨割当有効期限の最終月に当たること、米国輸出入銀行借款による大口機械の輸入承認がなされたことなどやや特殊な事情によるとみられる面もあるが、やはり季節的な在庫補充や海外における国際商品市況引緊まりに伴う原材料、食料などの買付増加が大きく響いたものとみられる。

#### 輸 入 承 認 の 内 訳

(単位・百万ドル)

(月平均)	37年 4~6月	7~9月	10~ 12月	11月	12月	38年 1月
食 料	63 ( 59)	56 ( 59)	74 ( 48)	63 ( 44)	102 ( 62)	59 ( 48)
原 材 料	247 (314)	218 (291)	267 (223)	270 (220)	315 (252)	268 (214)
原 綿	33 ( 50)	27 ( 37)	37 ( 23)	36 ( 24)	49 ( 28)	41 ( 29)
原 毛	26 ( 37)	20 ( 21)	24 ( 21)	22 ( 21)	28 ( 20)	28 ( 19)
鉄 鋼 石	19 ( 20)	21 ( 21)	20 ( 17)	19 ( 16)	21 ( 20)	18 ( 16)
く ず 鉄	13 ( 50)	10 ( 35)	8 ( 23)	7 ( 27)	10 ( 24)	13 ( 13)
石 炭	13 ( 8)	12 ( 13)	11 ( 7)	12 ( 8)	12 ( 9)	14 ( 7)
石 油	48 ( 36)	38 ( 40)	61 ( 35)	72 ( 29)	63 ( 41)	57 ( 34)
木 材	21 ( 20)	23 ( 26)	24 ( 26)	25 ( 24)	28 ( 25)	23 ( 19)
鉄 鋼	3 ( 16)	5 ( 19)	4 ( 12)	5 ( 12)	4 ( 11)	3 ( 10)
機 械	63 ( 72)	51 (108)	61 ( 40)	45 ( 40)	68 ( 39)	97 ( 65)
その他共計	428 (510)	378 (542)	454 (365)	429 (358)	541 (411)	480 (380)

(注) カッコ内は前年同期(月)額。

輸入原材料の在庫事情をみると、12月のメーカー在庫指数は36年の在庫積み増しの始まる前と同水準、同在庫率指数は従来の最低となっており、在庫率を品目別にみても鉄鋼原材料、原皮を除いては軒並みきわめて低いところに落ちている。ここ2、3か月来の輸入先行指標に表われている原材料輸入の増加は、主としてこのような在庫事情に基づく補充買いが季節的買付けに加わったこ

とによるものと考えられる。それらの買付け分は

ながら、いま一段と増加するおそれは少ないよう

2～3月中心に入着(1月の通関には原材料の増

に思われる。

加はまだきほど出ていない。これには米国の港湾ストによる入着遅延もある程度響いている模様)するものと思われる。次に海外市況についてみると、昨秋のキューバ事件を契機に従来の低迷状態を脱した海外の食料、原料品市況や海上運賃市況は、その後異常寒波、米国港湾ストなどの影響によりかなりの堅調を呈し、これが若干買付態度の活発化、輸入金額の増嵩を招いたと推測される。しかし、最近は砂糖など一部の商品を除いては海外市況は全般に落ち着きを取り戻すに至っている。

以上のような事情に加え、生産がなお当分ははっきりと上向くことはないとみられることを考慮すれば、輸入は引き続き高水準持続の見込み

輸 入 素 原 材 料 在 庫 の 推 移

		36年 3月	12月	37年 3月	6月	10月	11月	12月
メ  カ  イ  デ イ ラ ー	素原材料在庫率	94.9 ( 96.8)	96.4 (102.6)	96.7 ( 98.7)	99.3 (101.1)	91.3 ( 92.7)	93.1 ( 96.5)	84.5 ( 89.9)
	〃 在庫指数	107.3 (108.4)	126.4 (130.0)	123.5 (124.8)	123.0 (120.5)	112.8 (110.9)	109.8 (111.7)	103.5 (106.5)
	〃 消費指数	131.1 (112.0)	131.1 (126.7)	127.7 (126.5)	121.4 (119.2)	123.5 (119.6)	118.0 (115.7)	122.5 (118.4)
	原 綿	177	169	187	179	142	130	124
カ  イ  デ イ ラ ー	原 毛	246	285	282	279	241	233	234
	鉄 鉱 石	250	250	194	242	230	223	221
	く ず 鉄	76	113	135	158	139	139	131
	石 炭	152	165	163	209	228	230	194
	原 油	74	58	60	55	53	56	48
デ イ ラ ー	販売業者在庫率	105.8 (103.2)	74.1 (100.2)	77.2 ( 75.3)	86.3 ( 72.7)	53.1 ( 73.6)	55.8 ( 69.9)	— ( —)
	原 綿	128	100	140	135	99	89	65
デ イ ラ ー	原 毛	6	8	6	8	5	4	4

(注) 通産省指数(カッコ内は季節調整済み)。  
品目別の数字は在庫率(＝月末在庫量/月中消費量または引渡量%)。